

幼児期から児童期にかけての多面的自己の発達 (1)

— “他者から見た自己” の理解 —

○保崎 路子・無藤 隆・遠藤 利彦
(お茶の水女子大学) (聖心女子大学)

【問題と目的】子どもの自己認識に関しては、これまで数多くの研究知見が蓄積されてきているが、近年における大きな成果の1つはDamon & Hart(1988)による自己理解モデルの案出であろう。彼らのモデルおよび実証研究は、子どもが早期段階から既に、自己を多面的に描出し得ること示し得た点で、画期的な意味を持っていると言える。ただし、彼らの研究では、暗黙の内に一般的な(general)自己(特定の誰かではない一般的な他者から見た自己)に焦点が当てられており、子ども自身を取り巻く具体的・個別的関係の中における自己というものに対する配慮は相対的に欠落していると言わざるを得ない。筆者らは、Damonらにおける一般的な他者の視点ではなく、特定の具体的他者の視点(誰の目に映る自分なのか)を面接の中に盛り込むことによって、子どもの潜在的により豊かな、より深いレベルの自己認識の諸相を引き出し得ると考える。そこで本研究は、Damonらの枠組を踏襲しつつ、新たに「特定の他者から見た自己」に関する質問を設定することによって、幼児期から児童期にかけての多面的な自己認識の発達の様相を明らかにしたい。また、誰の視点をとるかということによって、自己記述にどのような差異が見られるかということに関して精細な分析・考究を行うこととする。

【方法】*被験児：保育園年長児32名(5;11)、小学校2年生37名(8;6)、4年生35名(10;6) *手続き：Damon & Hart(1988)を参考に「(特定の他者を設定しない)自己」と「他者(母・先生・好きな・嫌いな友達)から見た自己」に関する質問(1)好きな・2)嫌いなところ、3)いい・4)悪いところ、5)どんな子、6)どんな子になりたい)を作成し、個別インタビューを実施した。そして、まず上記1)~6)の下位質問ごとに子どもの言語報告にa)身体的・外的属性、b)行動と行動評価、c)対人関係の行動とその特質、d)感情・心理的属性のいずれかのカテゴリに該当するものがあるかどうかを検討し、あった場合に得点1を付与した。さらに6下位質問全体の合計得点を、a)~d)の各カテゴリごとに算出した(これを以後、自己記述得点と呼ぶ)。

【結果と考察】①自己記述得点の発達差(Fig.1)：年齢による自己記述得点の差を調べるために、自己記述得点を従属変数、年齢とカテゴリを独立変

数とする分散分析を行ったところ、年齢とカテゴリの主効果および交互作用が認められた(いずれも $p < .001$)。加齢に伴い全般的に自己記述は増加するが、全てのカテゴリで増加する訳ではなく(身体的属性に関する言及は減少)、特に対人関係や能力に関する言及が増加することが明らかになった。これらの結果から、小学生にとって、対人関係に加え行動や能力の評価が自己を記述する際に重要であることが推察される。②誰の視点かによる記述パターンの差異：誰の視点をとるかによって自己描出にどのような違い(どのカテゴリが強調されるか)が見られるかを検討したところ、各年齢に特徴的なパターンが認められた。幼児では「友達から見た自己(以下友達→自己)」においてのみに、関係カテゴリの得点が高い、関係カテゴリ強調パターンが見られた。2年生では、どの他者の視点から見た自己においても、関係カテゴリ強調パターンが見られた。4年生では「友達→自己」で関係カテゴリ強調パターンが、「自己」「母→自己」「先生→自己」において、関係カテゴリと行動カテゴリの両方の得点が高い関係・行動カテゴリ強調パターンが見られた。これらの結果は、加齢とともに子どもが他者との関係の性質や他者からの評価を意識および重要視し(特に母や先生から見た自己において行動評価を重視するようになり)、それに応じて分化した自己記述をなし得るようになることを示唆する。子どもは、それぞれの関係の中で他者の目に自身がどのように映っているか、他者は自身の特にどの面に注視しているかということに敏感に察知し、可変的・多面的な自己表象を構築するに至るのだろう。

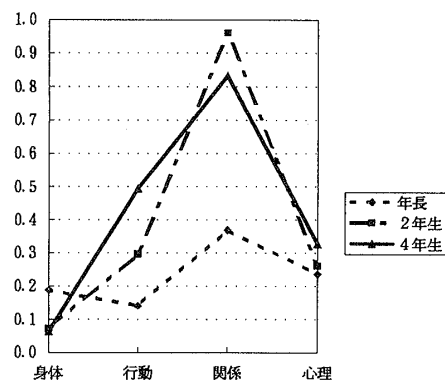


Fig.1 年齢とカテゴリ